



元構造解析研究者の 異世界冒険譚 1

α L P H α L I G H T

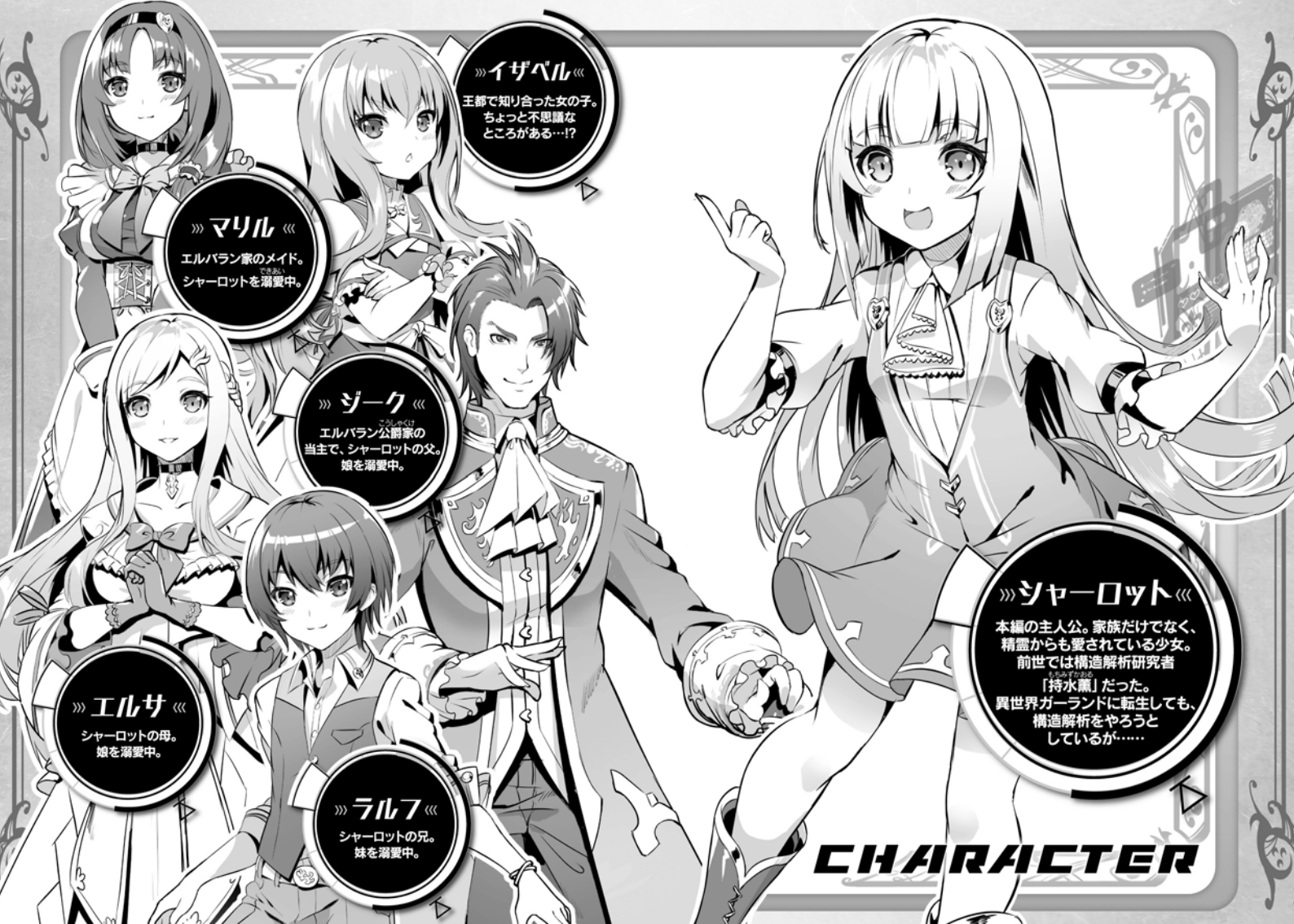
犬社護

Inuya Mamoru



アルファライト文庫





» イザベル «

王都で知り合った女の子。
ちょっと不思議な
ところがある…!?

» マリル «

エルバラン家のメイド。
シャーロットを溺愛中。

» ジーク «

エルバラン公卿家の
当主で、シャーロットの父。
娘を溺愛中。

» エルサ «

シャーロットの母。
娘を溺愛中。

» ラルフ «

シャーロットの兄。
妹を溺愛中。

» シャーロット «

本編の主人公。家族だけでなく、
精霊からも愛されている少女。
前世では構造解析研究者

「持水黨」だった。
異世界ガーランドに転生しても、
構造解析をやろうと
しているが……

CHARACTER

1 話 構造解析研究者、死す

はあ、ここ三ヶ月の苦勞が報われたわ。

私——持水薫^{もちみずかほる}は、とある製薬会社の研究員だ。三ヶ月前、上司から物質Xの構造解析を頼まれた。物質Xは、とある病気に関わるタンパク質^{たんぱくしつ}なのだが、これまで大量生産が不可能だったため、構造解析はなされてこなかった。このたび、大量とまではいかないが、それなりの量が生産できるようになったので、私に構造解析の仕事が回ってきたのである。

——そして三ヶ月経った今、かなり苦戦したけど、X線解析やNMR^{核磁気共鳴}（核磁気共鳴）といった機器^{きき}を駆使^{くし}して、世界で初めて物質Xの立体構造を解析できた。

現在、私は研究所の二階にあるフロアの一角で、パソコンで物質Xの立体構造を眺めて^{ながめて}いる。ここはフロア全体がオープンスペースとなっており、同僚たちもここで議論し、実験^{じけん}を行っている。世界初の発見をこんな場所で見ているのかと疑問に思うかもしれないが、私のパソコンはネット接続していないし、傍目からはなんの構造解析データなのかわからないため、まず情報が盗まれることはない。

それにしても、この3Dで表示されたXの立体構造、いいわ。この形、この曲線、いく

つものユニットが組み合わさったこの全体像、素晴らしい！ここ三ヶ月、残業を続けたかいがあった。

「薫さん、その笑顔が気持ち悪いです」

私の横に現れたのは、後輩の伊宮鈴だった。二十六歳、独身、現在片思い中の男性あり。ナチュラルなショートヘアで、歳のわりに若く見えるから、男性社員に人気がある。

「鈴、このタンパク質の立体構造がやっとわかったのよ。あなたにもわかるでしょう？この構造の凄さが！」

「……あの、確かにわかりますよ。ただ、先輩の仰る凄さと私の思う凄さは、違う気がします」

「——やめとけ、鈴。薫がこの状態に入ると、しばらく戻ってこないのは知っているだろう」

お、一条のお出ましか。

一条誠、三十歳、独身、私の同期で超イケメン。男として文句の付けどころがない性格のため、女性陣が常にロックオンしている。機会があれば話しかけられたり、食事に誘われている場面を数多く見てきた。でも残念、一条には片思い中の女性がいる。今、私の目の前にいる鈴だ。

「はあ、そうでした。一条さん、薫さんはどうしてずっと一般研究員でいるんですか？」

もったいないですよ。どう考えても、チームリーダーにもなれる優秀さです。薫さんのおかげで、多くの物質の立体構造がわかり、その機能も解明できたじゃないですか。しかも薫さん本人も、それらの実績を全部他の人に譲っているし……みんな、おかしいですよ」

「あーうすうすわかっていと思うが、こいつは未知の物質の立体構造を知りたいだけなんだよ。立体構造フェチなんだ。未知の物質の新機能とかはついてる。立体構造がわかれば、あとはもういらないから、人に譲っているんだよ。上の連中もそれがわかっているんで、平の研究員のままにして、構造解析ばかりやらせているんだ。その代わり、チームリーダー並みの給料をもらっているぞ。周りの連中も、薫の実績を知っているから、何をしても誰一人文句を言わん」

その通りだよ、一条！私は、物質の立体構造がわかれば、他のことは心底どうでもいい。

「薫さんが望んでいるのならいいんですけど、もったいないな」

さて、物質Xの立体構造を十分に堪能したところで、報告書を作ろうか。

「それはともかく、薫さん、そろそろ昼食の時間ですよ」

あれ？もう、そんな時間？時計を見たら、ちょうど十二時を指していた。三十歳を過ぎたら時間が経つのが早くなると聞いたことがあるけど、本当かもしれない。

「じゃあ、三人で昼食にいきますか！今日は、肉うどんでもいいかな」

私が席を立つと、それに連動するように、みんな続々と仕事をやめ、一階の食堂へ歩き出した。

「肉うどんだけじゃ、栄養が偏かたよっちゃいますよ。昨日まで残業していたんだし、もう少し栄養のあるレディースランチにしてください！　せめて、サラダを食べてください」

「ははは、鈴は完全に薫の妹みたいだな」

「うんうん、鈴が私の妹になってくれたら大歓迎するわ」

「私も、薫さんがお姉さんのように感じますよ」

私たちが部屋を出て通路を歩いていると、道を半ば塞ふさぐように大型機器が置かれているのを見つけた。確か、廃棄処分する予定のものであったかな。

私たちがその大型機器を避けようとした瞬間、研究所全体が少し揺れたように感じた。

まさか、地震？！

「一条、なんか揺れてない？」

「ああ、地震か！」

「だんだん揺れが大きくなってますよ！」

「二人とも、機材から離はなれなさい！」

しばらく身を屈かがめていると、揺れが収まった。そして、二人の様子を確認したら――
「……ちよっと二人とも、いつまで抱き合っているの？」

「え、あ、一条さん、すみません」

「い、いや、こっちこそすまん」

この二人、両思いなんだから、いい加減どちらかが告白して付き合えばいいのに。

あ、そんなことより！

「二人とも、実験室に行くわよ。機材が心配だわ。倒れてなきやいいけどね。明日からの構造解析に差し障さわる」

「薫さんの頭には、それしかないんですか？」

「ない！」

「即答するなよ。とにかく急ごう」

実験室に行くと、地震対策済みだったので機材は無事だった。通路にある大型機器も問題ないわね。

再び食堂に向かおうとしたら――　　またしても大きな揺れが研究所を襲おそう。しかも、さっきよりかなり強い！

あー！　大型機器が大きく揺れて、鈴と一条がいる方へ倒れそうになってる！
動け、私の足！

大きな揺れの中、身体からだをあちこちぶつけながら、なんとか鈴と一条がいるところまで走った――

「鈴、一条、後ろを見なさい！」
「え」

まずい、大型機器が二人に向かって倒れてきた。二人とも身体が硬直していて、このままだと下敷きになる！ なんとしても、二人を助ける――

「か……お……る……さん」

「か……お……る」

声が聞こえる。誰だろう？ 私の名前を必死で叫んでいる人たちが目の前にいる。

「う……鈴……一条……無事？」

なんだろう？ 身体がまったく動かないし、感覚もない。あ、視界が開けてきた。

「薫さん！ 薫さん、しっかりして！ 救急車が来るから！」

「薫！ もう少しの辛抱だ！ この大型機器を退かすから待っててくれ！」

鈴が大粒の涙を流しながら、私の名前を必死に叫んでいる。一条も、大型機器を一人で持ち上げようとしている。この感覚……私は……もうすぐ死ぬわね。せめて、あの二人には……辛せになって欲しい。最後に一言でいいから、鈴に話を……

「……鈴」

「はい、なんですか！」

「鈴、一条……あんたら両思いなんだから、恋人になって結婚しちゃえ」

「お、お前、こんなときに何を……」

「はい、はい、わかりました。だから死なないで！」

鈴の返事を聞くと、私の意識は途絶えてしまった――

――ここはどこだろう？ 白い空間に、私一人だけがいる。ふいに後ろから声が聞こえた。

「次は、あなたですね」

振り向くと、ロングで黒髪の綺麗な女性が立っていた。女の私が見惚れるほどの綺麗さだわ。大和撫子という表現がピッタリね。でも、ここまで綺麗だと、無性に腹が立つわね。

「一発、殴らせろ！」

「会ってそうそう、なにトチ狂ったことを言っているんですか！」

あれ？ あのととき、私は間違ひなく死んだよね？ 死因は、大型機器による圧死かな？ ということは、ここは死後の世界？ そうなると、この女性は……とにかく謝ろう。

「すみません。死んで間もないのに、いきなり最上級の美女が目の前に現れたので、同じ女である私への嫌味かと思ひ、殴りたくまりました」

「そこ！ 言っていることがおかしいです！」

「死んで間もないので、混乱していると思ってください」

私が死んだのは、ついさっきだ。そこにこの白い空間、最上級美女の登場、冷静でいろいろの方が無理、言動がおかしくなって当たり前だ。というか、本音がダダ漏れになっていただけかな？

「まったく、あなたのような失礼極まりない人間は初めてです。コホン、改めて、私は地球の日本地区を担当する女神ミストラテルと申します。お察しの通り、あなたは先程の地震で死にました」

「女神様、鈴と一条を助けてから記憶がありません」

「死因は、大型機器の下敷きによる圧死ですね。あなたが助けたお二人は、その後結婚し、三人の子供が生まれています。毎年、あなたのお墓参りをしていますよ」

月日の経過が早すぎなのでは！

「あなたの精神と魂が落ち着くまで、時間がかかったのです。あなたにとってはつい先程のことかもしれませんが、現世ではあの未曾有の大地震から十五年が経過しています」

十五年!? その間、私は眠っていたようなものか。

「おおむね、状況を把握できました。それで、女神様がどうして私の前に？ まさか、私は神様の不注意で死んだとか？」

「違います。人口が多くなっただけとはいえ、きちんと管理しています。あなたは友人を助けて死ぬ運命だったのです。ただ、あなたのように綺麗な魂を持ち、友を助けるほどの善行

をした方には、救済措置が発生します」

「救済措置？ どんな措置があるのですか？」

「それは転生です。通常の場合、すぐには転生できませんが、あなた方のような善良な人たちが若くして亡くなった場合に限り発生する特例ですね」

若く……三十歳でも若いと言えるのだろうか？ 転生か……待てよ！

「あの、転生というのは、人間に転生するんですね？」

「ええ、そうです」

よかった。いくら特例でも、アリとかキリギリスのような生物への転生は嫌だからね。「それで転生先ですが、この地球にしますか？ それとも別の惑星にしますか？」

今なんて言った、この女神？ 別の惑星？ では試しに、あれを言ってみよう。

「魔法のある異世界に転生とかいうのはないですか？」

「はー」

えー、いきなり溜息をつかれた。なぜ？

「ここ最近、亡くなった若い人たちは、必ずそれを言いますね。言っておきますが、こことは別の空間にある世界のことなのでしょうが、そんなものあるわけじゃないでしょう」

断言された。夢も希望もないな。でも、まだ諦めない。

「それじゃあ、この宇宙の中で、魔法が使える人間が住んでいる惑星はありますか？」

「それならあります。あなたたちの言うステータスも存在しています」
 やった！ 言ってみるものだ。それなら異世界と変わらない。これだけ宇宙は広いのだから、魔法がある惑星は必ず存在していると思ったのよ。

「そこに転生をお願いします」

「わかりました。特典として、二つのスキルを差し上げましょう。限度がありますが、何がいいですか？」

「『構造解析』と『構造編集』をお願いします」

やっぱり、この二つは外せない。

「『構造解析』？ ああ『鑑定』のことですね」

この女神、『構造解析』と『鑑定』を同義と思っている？

「今なんて言ったのかしら、女神様」

「え、だから『鑑定』だと。あれ？ なんか怒ってます？」

うん、この女神には、お説教が必要のようだ。

「『鑑定』と『構造解析』はまったく異なるものです。『鑑定』は外側から物品を見て、それが本物か偽物かを判断したり、優良か劣悪かを判断します。ただし、人によっては価値観の違いで誤ることもあります。『構造解析』は内側から物品を見て、一つ一つの分子構造を詳細に解析するのです。よって、誤った結果を出しません。全てが真実なのです。」

『構造編集』は解析した構造を編集することにより、物品をより進化させることができるのです」

『構造編集』に関しては、そんな技術があればいいな、と常日頃から思っていたものだ。

「わ、わかりました。丁寧な説明ありがとうございます。『構造解析』と『構造編集』、確かにそのようなスキルがあれば面白そうですね。私が新たに作り、あなたの中に入れておきましょう」

よっしゃ！ 言ってみるものだ。あ、それと――

「女神様、転生したら前世の記憶や性格はどうなるのですか？」

「前世の記憶を残すのか消去するのは、あなた方にお任せしています」

「残したまま、転生をお願いします」

「わかりました。転生先は公爵家の長女となっていますが、よろしいですか？」

貴族か、まあ長女なら変な扱いをされることはないだろうし、いいかな。

「はい、それでお願いします」

その後、女神様から転生した後のことで、いくつか注意点を教えられた。

一、惑星ガーランドの気には、空気だけでなく、魔素も含まれる。

二、魔素があるため、全ての生物には魔力が宿っている。

三、『魔力感知』『魔力操作』『魔力循環』といった数多くのスキルや魔法が存在する。

四、三歳になるまで、魔力の使用禁止——特にこれはきつく忠告された。

「最近、前世の記憶を残しつつ、〇歳の頃から魔力の修業しゆぎやうをしようとする若い人が続出しています。理由を聞くと、小さい頃から修業をすると魔力が異常に高まって、大人になってからチートができるという理由でした。馬鹿としか言いようがないですね。よく考えてください。確かに子供の頃から熱心に修業をすると、魔力は異常に高まります。ですが、産まれたばかりで身体もまったく育っていない状態から、魔力の修業をしないわけません。魔力は確かに出ますよ。でも、制御できません。無理にすると……最悪死にます。よくても、二度と魔力が出ない身体になるでしょう。私は、再三注意しました。それでも若者たちは、チートのために実行するんです。そして、見るも無残むざんな結果となった人が続出しました。いいですか、あなたはやってはいけませんよ。やるにしても、『魔力感知』だけにしてください。あれなら魔力が身体の外に出ることはないし、危険はないでしょう。魔力の修業は三歳からです」

美人が台無だいなになるほどの凄い形相ぎやうさうで言われたため、少し引いてしまった。女神様がこれだけ真剣に言うのだから、本当のことなのだろう。

惑星ガーランド、転生先は公爵家の長女、三歳になるまで訓練禁止、全ての重要事項を把握はあくしたところで、お別れの時間が訪れた。

「あなたならば、転生後の新たな人生を謳歌おおかできるでしょう」

女神様が言い終わると、私の身体は光に包まれていった。

どんどん光は強くなっていき、そこで意識が途切とぎれた——



行きましたか。不思議な女性でしたね。あんなスキルを望むなんて思いもしませんでした。心の綺麗きれな方でしたから、悪用することはないでしょう。ただ、生まれる年が問題ですね。確か聖女が生まれる年だったはず。妙なことに巻き込まれないといいのですが……

それでは、次の方を転生させましょうか。

この子は十五歳の女性でしたか。

2 話 神託しんたく

惑星ガーランドには、アストレカ、ハーモニック、ランダルキアという三つの大きな大陸があり、人間、獣人、ドワーフ、エルフ、竜人、魔人といった多くの種族が闊歩かつぱしている。そして——人間の比率が高いアストレカ大陸の南端に位置するエルディア王国では、

深夜零時を過ぎ新年を迎えたこともあって、多くの人々が新たな年の門出を祝っていた。みんなが楽しく酒を酌み交わす中、神ガールランドを祀る教会では、とある神託が下された。今から二十年後、大災厄が訪れる。

しかし、恐れるな。今年生まれる女の子の中に聖女がいる。

聖女は十歳になると頭角を現し、多くの人々を救うだろう。

やがて勇者も現れ、大災厄の源を祓う。

ただし、安心することなかれ。

聖女の働き次第では、勇者は現れない。大災厄は祓われない。

その場合、国は滅亡するだろう。

この神託を知ったエルディア王は、今年女の子が生まれたときは、国に必ず報告するよう命令を下した。神託の内容は世間に公表されたが、『今年聖女が生まれる』という部分だけだった。国民たちが混乱しないようにするための配慮だったのだが、これが原因で『とある女の子』に真意が伝わらなかった。そのため五年後、彼女の『とある行動』をきっかけに、神託に記された未来が大きく変化することを、この時点で誰一人予測していなかった。そう、神託を下した神ガールランド自身さえも……



ガールランド暦千三百六十九年、エルバラン領の領主であるエルバラン公爵家に一人の赤ん坊が産まれようとしていた。当主のジーク・エルバランと、その息子であるラルフが、ダブルサイズのベッドで苦しんでいる女性エルサを見守っていた。

ラルフはまだ三歳ということもあり、出産の意味をきちんと理解していないが、苦しそうに呻く母親を見て、只事ではないのを察していた。父の言い付けを守り、ソファでじつと母親を見つめている。

一方のジークは、ソファに座っているものの、落ち着きがなく、時折妻のエルサに「頑張れ、もう少しだ！」とエールを送っていた。そばに行きたい気持ちを抑え、妻が無事に新たな命を産んでくれることを強く願っていた。

ラルフとジークに見守られているエルサは、赤ん坊を産もうと必死だった。隣には、六十歳くらいの助産婦が、必死に赤ちゃんを取り出そうとしていた。そして――

「おぎゃー！ おぎゃー！」

「奥様、おめでとうございます。可愛い女の子ですよ」

産まれた赤ん坊は、銀色の髪で薄い青色の瞳をしており、母親似だった。

「はあ、はあ、はあ、ジーク……女の子ですって……とても可愛いわ」

息も絶え絶えではあったが、エルサは自分の娘の誕生に深く感動していた。

「エルサ、頑張^{がんば}つたな。可愛い女の子だ。名前は、シャーロットだ！ラルフ、今日から兄さんになるんだぞ」

「お兄ちゃん？ えへへ、お兄ちゃん、僕は今日からお兄ちゃんなんだ！ シャーロット、お兄ちゃんだよー」

仲睦^{なむつ}ましい家族で、周りは笑顔に包まれていた。ただし、一人だけ笑っていない者がいた。シャーロット本人である。

——やめてよ。シャーロットはやめてほしい。恥^はずかしすぎる！ 成長して、姿が名前と違いすぎたらどうするのよ。まさか、産まれてすぐに自我を持つとは思わなかった。絶対に知られたくない。知られたらヤバイ。あの女神く、少しは気を使えよ！！

シャーロットはずっと愚痴^{ぐち}を言い続けていたが、それは「おぎゃー」にしかならず、周りからは元気な女の子だと判断されてしまった。

持水熏改め、シャーロット・エルバランの転生譚^たが今始まる。

3話 三歳になりました

私——シャーロット・エルバランは三歳になった。ここまで長い道程^{みちのり}だった。まさか、

産まれた直後から自我があるとは思わなかった。○歳で自我があると思われたら、気持ち悪いと思われて最悪捨てられる。転生した途端^{とたん}、親に捨てられるのは悲惨^{ひさん}すぎる。だから、家族や使用人たちの前では喜怒哀楽^{きどあいらく}の表情に気をつけた。また、転生するときに女神様がこの星の言語を理解できるようにしてくれたみたいだが、言葉が通じているとバレないようにも注意するはめになった。どこの世界に、言葉を全て理解できる○歳児がいる。

ともかく、動けない○歳の間は、家の限定で、周囲の景色や両親と使用人たちの会話で、惑星ガーランドを知ること集中した。

女神様のアドバイスから、『魔力感知』スキルだけを集中して訓練していたのだが、退屈しなかった。生物全てから感じる魔力の質？ 色？ とにかく構造解析とは違う面白さがあるのだ。

一歳近くになると、家周辺の生物を感じできるようになった。そして一歳二ヶ月となったとき、なんと精霊様が見えるようになった。どうやら普通の人には見えないらしい。毎日遊んでいたせいか、私のことを気に入ってくれた。

精霊様たちと出会って一週間ほどすると、急に頭の中に声が聞こえてきた。どうも、私の知能が高いことを不思議に思ったらしく、テレパシーに近い魔法で話しかけてきたようだ。そこで、前世の記憶があること、地震で命を落とし、地球の女神様の計らい^{はか}で惑星ガーランドへ転生し、産まれた直後から自我があることなんかを話した。そうしたら、精

霊様たちは同情してくれて、より親密さが増した。

しばらく経つと、遊ぶだけだと悪いと思ったのか、惑星ガーランドの環境やスキル、魔法、魔導具などを基礎から丁寧に教えてくれた。でも一歳からこんな知識を付けて、問題ないのだろうか？

ただ、せっかく教えてくれているんだから、文句は言えないよね。何事も基礎が一番大事なので、しっかりと学ばせてもらった。

そのおかげで、この世界のことでも詳しくなった。ここは地球よりも少し小さい。人間、エルフ、獣人、ドワーフなど多種多様な種族がいる。私がいる国は、人間が統治するエルディア王国だ。

スキルと魔法のレベルは1〜10まである。魔法を使用するためには、自分自身が持つ属性と魔法量を把握しなければならぬ。

属性は、精霊の種類と同じ数だけ存在しており、火・水・土・木・風・雷・空間・光・闇の九つがある。人は、産まれつき属性を持つらしいが、人によって所持する属性が異なっているらしく、一つしか持たない人もいれば、四つ持つ人もいるし、稀に九つ全てを持っている人もいる。

そして、魔法は所持している属性しか使用することができない。

こういった具合に、精霊様は数多くのことを私に教えてくれた。本当にありがたい。た

だし、教えてもらっただけで、使用はできない。肝心の技術がないからだ。

私は女神様の言い付けを守った。今までは、『魔力感知』しか使っていない。そして、三歳となった今、やっと『魔力操作』と『魔力循環』の訓練ができる。チートとかはできないだろうけど、子供の段階で基礎スキルを上げておいた方が、魔法とかも覚えやすいはずだ。私の人生は、ここから新たな一歩を踏み出す！

——現在、私はお母様と文字の勉強をしている。

母の名前はエルサ。私と同じ銀髪で、瞳は薄い青、どこか癒されるフワリとした綺麗な顔立ちをしている。服装も、顔に似合う爽やかなデザインドレスを着用している。私は三歳だから、ドレスを着るのはまだ早いよね。重要なお客様が訪れたときは別だけど、普段は街の子供たちよりも少し上等くらいの子供服を着ている。

うちは、公爵家だからといって、無駄に豪華な服は着ない。いつどこで災害が発生するかわからないから、質素節約し、余った予算や食糧は備蓄しているのだ。

「ふふ、シャーロットは可愛いわね。見てて、癒されるわー」

「嬉しい、お母様」

うーん、中身が三十三歳のおばさんだから、自分の発した言葉に違和感を覚える。まあ、かなり慣れてきてはいるけど、自分が三歳であることを忘れてはいけない。

コンコンと、ドアを叩く音が聞こえた。昼食の時間かな？

「はーい。どうぞ」

「失礼いたします。奥様、シャロットとお嬢様、昼食の準備ができました」

「わかりました。シャロット、行きましようか」

「はーい」

呼びに来たのは、メイドのマリル、十五歳の女性だ。この人は本当に苦勞人なんだよね。五年前、村が盜賊に襲われ、まだ小さかった弟さんとなんとか逃げのび、私のお父様と出会ってメイドになったそうだ。髪色は赤く、長さはセミロング、まだ幼さを残しているけど、可愛いというより綺麗な顔立ちだ。

「お嬢様、先日はありがとうございました。お嬢様が教えてくれたおかげで、池の近くで高熱を出していた弟を発見できました。すぐに医者に診てもらい、薬を処方してもらいました。今は健康に戻り、後遺症もありません」

「私じゃないよ。木の精霊様が教えてくれたの。いつも、花のお世話をしてくれているお礼だつて。感謝は木の精霊様に言つてね。助かって良かったね」

私がそう言うと、マリルは周りをキョロキョロした。木の精霊様を探しているのかな？

「木の精霊様、ありがとうございます。ところで奥様、お嬢様、お願いがあるのですが？」

「あら、マリルからお願いは珍しいわね」

「なーに？」

「お嬢様を抱きしめてもいいですか？」

は？ なぜ抱きしめる必要がある？

「ふふふ、あなたもシャロットにやられちゃったかな」

「え、別にいいけど？」

「ありがとうございます。……あゝ癒されます」

なんで？ 確かに私の見た目は、自分で言うのもなんだが可愛い。長い銀髪、パツチリお目目、見てフワツとした印象がある。でも、抱きしめただけで癒されるのだろうか？ 「そろそろ、みんなのところに行きましよう」

お母様の言葉で、マリルは名残惜しうに私から離れていった。ちなみに、私が精霊様たちを見て話もできることは、家の中では周知の事実となっている。たまに、精霊様たちから聞いたことをお父様に告げていたためだ。あまり話せない時期だったので、内容をわからせるのに苦労した。今でも、話すときは細心の注意を払っている。演技するのは大変だ。

食堂には、すでにお父様とお兄様がいた。

「お父様、遅くなりました」

「大丈夫だよ、シャロット。私たちも、今来たばかりだからね」

お父様は、相変わらず爽やかな顔だ。

「シャーロット、おいで」

「はい、お兄様」

お兄様も、お父様に負けないほど爽やかな顔なんだよね。

お父様は三十二歳らしいけど、年齢より若く見える。お兄様もまだ六歳だけど、お父様に似ている。将来イケメンになって、女性陣に囲まれるだろうね。あの爽やかな顔で、綺麗な歯をチラッと見せて微笑んだら、何人の女性が撃沈されるだろうか？

「ラルフも、すっかり立派なお兄ちゃんになったわね」

「お母様、僕は兄だからね。シャーロットは僕が守るんだ」

「ふふ、そうね」

「——それじゃあ、昼食をいただきますか」

「……神ガーランドよ、感謝します」

ここの食事は、ヨーロップのものに近い。米の代わりにパンを食べている。料理自体はなかなかのものだ。ただ、やっぱり米や味噌が欲しい。かといって、私には味噌を作る技術がないため、もう少し成長したら市場で探す予定だ。精霊様たちに聞くと、もっと東に行けば、似たようなものを見たことがあると言っていた。必要なら、いつか旅に出よう。

昼食も食べ終わり、一息ついたところで、お父様が口を開いた。

「ラルフ、お前ももう六歳だ。そろそろ剣術の稽古をつけてやろう」



「お父様、本当ですか!!」

いいな。私にも、魔法の稽古をつけてほしい。

「お父様、私にも教えてください。でも、剣術より魔法がいいです」

「残念だが今はダメだ。五歳になって、教会で祝福をもらってからな」

「……はい。ううお兄様、いいな」

「シャーロット、そんなふてくされた顔をしてダメよ。魔法の訓練は五歳からという決まりなの。未熟な身体で無理に習うと、二度と魔法が使えなくなる可能性もあるの」

お母様に軽く叱られてしまった。

仕方ない。今は『魔力感知』『魔力操作』『魔力循環』を鍛えるしかないね。

「そ、そうだが、シャーロット。決まりだから仕方がないんだ」

でも、お父様の心は揺らいでいた。この家族は、基本的に私に甘い。前世の記憶があるから我慢できているけど、なかったら我儘な性格になっていたかもしれない。

それにしても五歳からか。あと二年の辛抱だね。この世界では、教会で祝福を受けるまで、自分のステータスを見られられないらしい。祝福を受けて適性を知ってから、自己を鍛えていくことになる。

お兄様には、水・雷・風の適性があり、スキルと総合すると剣士が最も向いているという。この一年間、ずっと基礎体力をつける訓練と木刀による素振りしかできなかったから、

いざ剣の稽古ができるとなると嬉しいのは当然だよ。

昼食を食べ終え、自分の部屋に戻り、マリルに絵本を読んでもらった。さすがに三歳で絵本を読めるのは、ちょっとね。

早く自分のステータスを見たい。私は、どんな適性を持っているのだろうか？

多分、現時点で『構造解析』スキルは使えるはずだけど、スキル使用の際、魔力を必要とするのかはわからない。もし必要なら、名前からしてかなりの魔力を使う気がする。精霊様をお願いすれば、自分のステータスを見せてくれるだろう。でも、それは他の人たちに悪い。五歳になるまでは『魔力感知』『魔力操作』『魔力循環』を徹底的に訓練しよう。『魔力感知』はこれまで鍛えてきたから、自分の魔力がどれほどなのか、どのくらい減っているのかは、おおよそわかるはずだ。

そう、焦ってはいけない。全ては基礎を重点的に鍛えてからだ。全ては『構造解析』のために。

4話 五歳になりました

ついに、昨日五歳になった。

教会から祝福を受ける歳になったことで、家族だけでなく、精霊様や使用人たちからもお祝いの言葉を盛大に言われ、料理もこれまでの誕生日に出されたものより豪華だった。前世でも、ここまでお祝いされたことがなかったので、感極まって泣いてしまった。

そんな誕生日の翌日――

コンコンと、私の部屋のドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

入ってきたのは、メイドのマリルだ。

「失礼します。お嬢様、ジーク様がお呼びです」

「わかりました。すぐに向かいます」

お父様と呼んでいる。もしかして、ついに祝福を受けるときが！

お父様の部屋には、お母様もいた。お父様はにこにこしながら口を開いた。

「シャーロット、昨日は楽しかったかい？」

「はい、とても楽しかったです」

「それはよかった。実は急だけど、二日後シャーロット一人で王都に行ってもらうことになった」

え、私五歳児なのに。王都は歩いていける距離じゃない。お父様は私に死ねと言っているのだろうか？

――と、お父様がお母様にスパーンと頭を叩かれた。

ここにハリセンがあれば、良いツツコミとなっていたことだろう。

「あなた〜それじゃあ、シャーロットに死ねと言っているようなものよ。シャーロットを見なさい、顔が真っ青になっているじゃない！」

そりゃあ、一人で王都に行けと笑顔で言われたら、真っ青にもなるよ。

「あ、すまん！言葉が足りなかったな。昨日、シャーロットも祝福を受けられる年齢になった。ただ、今年五歳になった子供だけは、ある理由から王都の教会で祝福を受けねばならない」

やった、祝福！でも、ある理由ってなんだろうか？

五歳の子供が一人で王都に行くとなると、相当な理由があるはず。

私の疑問は、お母様が解決してくれた。

「シャーロットが生まれた年、エルディア王国内で聖女も生まれたそうなの。王は聖女を守るため、今年五歳となる女の子全員を、王都にあるガールランド教会に呼び寄せて、祝福を受けさせることにしたの。毎月、誕生日を迎えた子たちには、王都に行ってもらっているわ。まだ続けているということは、聖女は見つかっていないよね」

「私以外に何人いるんですか？」

「ここは広いから三つの区域ごとにそれぞれ移動することになっていて、この地域は

シャーロットを入れて四人だ。送迎と護衛は王国騎士団が行う。本来なら、私たちも同行したいところだが、子供たちだけで来て欲しいという要請があつてね。旅行日程は、往復八日、王都滞在期間は二日、合計十日間だ。心細いだろうが、我慢するんだよ」

お父様から言われた旅の日程、五歳児だと、結構キツイね。おそらく、私以外の子供たちはかなり心細いはず、フォローしておいた方がよいね。

「十日間、長いですが頑張ります。シャーロットは成長して帰ってきます」

私にとっては、初めての旅行だ。両親がいないからハメを外せる。子供たちの面倒を見つつ、楽しませてもらう。

「それとねシャーロット、あなたは精霊を認識し、会話ができる『精霊視』の力を持っているわ。あまり言いたくないのだけど、これまで、『精霊視』を持っていた女の子は聖女様しかないの。つまり、あなたが聖女である可能性が極めて高いの。『精霊視』のことは、今後他人には絶対言わないようにね。家の者たちにもきつく言つてあるわ」

なんだって！ ここにきて、お母様からの爆弾発言！ 嫌です、聖女になんかなりたくない！

「もし……聖女であつた場合、私はどうなるんですか？」

「祝福を受けた後、そのまま帰つてきて私たちに報告するの。そして二日後、王都に向けて再出発し、到着後は教会に所属することになるわ。実家には、一年に一度戻ってくるこ

とが許されているだけ」

最悪だ。子供の成長の環境をぶち壊している。五歳の段階で、親から引き離してどうする!?

「だ、大丈夫ですよ。私が聖女のはずありません。お父様や、お母様、お兄様とも離れたくない！」

「うんうん、私もだよ。シャーロットが清らかな聖女のはずがない！」

「そうよ、シャーロットが清廉な聖女のはずがないわ！」

なんか、両親から貶されてるような気もするけどスルーしよう。そうだ、聖女になつてたまるか！ このとき、私たち家族全員の気持ちが一つになった。

二日後――

今日、いよいよ王都へ向けての長い旅が始まる。道中、魔物や盗賊に襲われる危険性もあると聞いているけど、そこは騎士団を信じるしかない。私にとって重要なのは、これまでの修業で、どこまで魔力量が上がっているか、その一点だ。

精霊様たちは『僕たちは一緒に行けないけど、魔力より別のことで驚くよ』と不吉なことを言っていた。あの言い方、まさか本当に私が聖女とかないよね？ ……うん、とりあえず忘れよう。

お、外が騒がしくなってきた。どうやらお迎えの騎士団が来てくれたようだ。

マリルが私の部屋に来て、騎士団の到着を報告してくれた。まずは、今回の護衛部隊を率いる隊長さんがいるというお父様の部屋へ向かった。

ノックをして部屋へ入ると、甲冑を着用したダンディーなおじさんが座っていた。

三十代中盤かな？ おじさんが着用している甲冑、全身が覆われているわけではない。上半身を守る鋼鉄の鎧と、小手だけだ。脇に剣が置かれている。

「この子が五歳になった娘、シャーロットだ」

「これは、お美しいお嬢さんだな。はじめまして、隊長のガロウ・インバルだ」

はじめの挨拶は肝心だ。きちんと自己紹介しておこう。

「はじめまして、シャーロット・エルバランです」

ここでは、きちんと貴族風の挨拶をしておいた。

「ほう、礼儀正しい女の子だ」

「そうだろう、自慢の娘だ。シャーロット、この人は子爵で、私の幼馴染なんだよ」

えー！ ということは、お父様と歳が近いよね。見た目よりちよつと若い……。五歳児がそれを言ったら傷つくだろうな。

幼馴染だから、碎けた口調なんだね。

「君のお父さんは平民から凄く慕われているんだぞ。俺とジークは、小さい頃から暴れま

わっていたな。剣術も、隊長の俺と互角だ」

お父様と普通に会話できるなら、私も気兼ねなく話せるよ。

「騎士のガロウ様と互角ですか!? お父様、凄いです！」

「あはは、おつとガロウ、本題に入ろう」

「そうだな。私の担当区域の女の子は、シャーロット以外、もうみんな馬車に待機している」

ありや、私が一番最後か。王都へ出発する前に、領主のお父様と挨拶しないといけないから当然か。

「お父様、聖女が見つかるといいですね」

「そうだな。シャーロットでないことを祈るよ。それで聖女についてなんだが、シャーロットに詳しく言っていない部分があった。人は重い病気や大怪我を負ったとき、特級ポーションか回復魔法を使う。ただどういうわけか、回復魔法『イムノブースト』で回復した人間のうち、手足の切断などの大怪我を負った者のみ、三年以内に死んでしまうことが、最近の研究でわかった。誰がやってもそうなる。理由は、わからない。聖女様の回復魔法だけは、イムノブーストと違い、使用してもまったく人が死なないそうだ。聖女様がいれば、大勢の患者を救うことができるんだ」

大怪我からの回復の場合、三年以内に死ぬ……か。理由は前世の科学の知識で、なんと

なくわかる。

回復魔法には二種類ある。一つは、『イムノブースト』。人間の自己治癒力を強化することで傷を瞬時に治す魔法。二つ目は、『ヒール』系。数種類存在し、大気中にある魔素を体内に入れることで、身体に足りない部分を補強し、傷や怪我を治す魔法。同じ回復魔法でも、原理がまったく異なる。軽い怪我なら前者で問題ない。ただし、骨折などの重傷は後者でやらないといけない。前者で行うと、細胞が弱ってしまうのだ。本来なら完治まで数ヶ月必要とするものを、十秒ほどで無理矢理完治させたら、細胞に多大な影響を与える。というか気持ち悪い。治るところを想像したくない。

病気の場合、臓器は大きくないと、ウイルスなんかは死滅させるだけだから、デメリットがないのだろう。

ただ、前者は消費魔力が少ない。後者は消費魔力が高い。

そして、元々はヒール系が使われていて、後からイムノブーストが生まれ、いつしかそちらしか使われなくなり、ヒール系は忘れられていった。

「あのくお父様」

「うん、どうした？」

「精霊様に教えてもらったのですが、回復魔法は二種類あります。知っていましたか？」
「なんだって、イムノブースト以外に回復魔法は存在するのか!!」

二人とも、あまりに驚いたからか、大声を上げた。

「シャーロット、詳しく聞いてもいいか？」

「ジーク、シャーロットは精霊が見えるのか？」

「ああ、そうだ。『精霊視』を持つている。家の者たちは全員知っているが、領民たちは知らない。内密にしておいてくれ」

「ああ……わかった。シャーロットすまん、話してくれ」

精霊様たちに教えてもらった回復魔法には、使用魔力が少ないイムノブーストと、使用魔力が多いヒール系の二種類あること、そして今はなぜかイムノブーストしか使用されていないこと——を、お父様たちに伝えた。

また、イムノブーストで死んでしまう原因も伝えた。前世の知識が、ここで役立つとはね。怪しまれるといけないから、全部精霊様から教えてもらったことにしておいた。

全てを話し終わると、二人は深刻な表情をしていた。

「ジーク、これは大変なことになるぞ」

「ああ、まず王都の図書館に行つて、回復魔法の文献を調べないといけない。あと、実証できる医者か魔法使いを探さないとイケないな。シャーロット、これからは私たちがやる」

「そうだな。よし、そちらは任せた。俺は任務があるから、シャーロットを王都の教会に

送っていく。時間があれば、文献を調べてみよう」

うわあ、なんか大事おおいじになってきた。でも確かに、イムノブーストがどう危険なのかきちんと証明し、代わりの回復魔法があることを世の中に広める必要はあるね。

話がまとまり、三人で玄関に行くとお母様、お兄様、使用人の人たちが、今にも泣きそうな顔で私を見ていた。ちえつ、これから五歳児らしく盛大に泣こう（演技）と思っていたのに興醒きようざめた。

「お母様、お兄様、お兄様、シャーロットは祝福を受けてきます」

「ええ、気をつけて行ってきたね。心細いと思うけど、我慢するのよ。大丈夫、あなたは絶対に聖女じゃないから安心していいわ」

「そうだよ、シャーロットが聖女なわけじゃないか。だから安心して行ってくるんだ」

お母様とお兄様がそれぞれ声をかけてくれる。

執事やメイドさんたちも、絶対に聖女じゃないと勇気づけてくれた。

「はい、みなさん、行ってきました！」

結局、全員から聖女じゃないと連呼れんこされつつ、馬車は出発した。

5話 王都までの道程

出発してから一時間、私以外の三人の子は全員、表情が暗く、一言も喋しゃべろうとしない。両親がいなくて心細いのはわかるけど、それにしても悲嘆ひたんの度合いが大きい。泣いている子さえいる。全員知らない人だからか、まるで親に捨てられたかのように悲しんでいる。

聖女が重要なものわかるけど、近くの教会で祝福して、聖女認定された子だけ王都に迎えればいいじゃない。なんで、こんな大袈裟おおげさなことをするのだろうか？

とにかく、この暗い雰囲気ふんいきをどうにかしなければ！

「ねえ、みんなしりとりして遊ばない？」

意を決して三人の女の子に話しかけると、緑色の髪をした子がか細い声で答えた。

「私たち、これからどうなるの？」

この子も、絶望ぜつぼうのどん底にいるかのような表情をしていた。

親と突然離れ離れにされたことで不安が増し、祝福の件を忘れているのかもしれない。じゃあ、まずは不安を解消してあげよう。

「王都の教会に行ってガーランド様からの祝福を受けたら、家に帰れるよ。これは子供だ

けの旅行だよ。みんなの心を強くさせるために、あえて子供だけで行かせているんだよ」
 「本当!? 私たち、売られたんじゃないの?」
 三人とも目を見開いている。やはり不安が高まっていて、親から言われたことを忘れて
 いるね。

「五歳の女の子の中に、聖女がいるんだって。その子を探すために騎士団の人たちが分担
 して、王国全土を歩いてくれてるんだよ。ほら、みんな強そうな人ばかりでしょ? この
 人たちが、私たちを守ってくれてるんだよ。売られたんなら、騎士団は来ないよ」

そこからは安心したのか、みんな笑顔で話しはじめた。お互いの自己紹介もした。

ニナは、赤色のシヨートボブで、少し気が強そうだった。

エリアは、茶色のセミロングで、気弱そうだった。

カイリは、緑のロングで、エリア同様、気弱な性格っぽい。

エリアとカイリは同じ村出身で、幼馴染らしい。顔立ちは全然違うけど、性格はよく似
 ている。ふたりの村は、私の家からかなり離れている。お別れしたら二度と会えないかも
 しれない。でも、ニナの村は私の家に近い。ニナとなら、毎日とまではいかなくとも、月
 数回なら会えると思う。私の名前を聞いて領主の娘と知り、三人ともはじめは敬語を使っ
 ていたけど、

「もう友達なんだから、敬語はなしね。気楽に行こう」

と言っただけから、緊張も解け、楽しく世間話できた。

ここから王都まで、約四日の道程。三人の不安を解消してあげられたし、楽しく過ごせ
 そうだ。そうほっとしたとき、後ろで休憩中の騎士さんが話しかけてきた。

「シャーロット様、ありがとうございます。途中、俺たちが何度言っても聞いてくれなく
 て、困っていたん……です」

「あの、シャーロットでいいですよ。他の子たちが気を使うと思うので」

「わかりまし……オホン……わかった、ありがとう。俺はアルと言う。今日から行き帰り
 の八日間、よろしくな」

四十代くらいで、口髭が似合っているアルさん、頼もしそうな人だ。よく見ると、身体
 のところどころに傷がある。騎士だから、これまでに多くの魔物や盗賊たちと戦ってきた
 のだろう。

「はい、こちらこそよろしくお願いします。あの、食糧を見ていいですか?」

「そりゃ構わないけど、まだどうして?」

アルさんが不思議そうな顔をしている。

「家の料理がいつも美味しくて、どんな食材で作っているのか気になっているんですが、
 厨房に入れてもらえなくて」

「ああ、公爵家の令嬢ともなると、調理している場所には行かせてもらえないか。あと